

〈特集「情報構造と名詞述語文」〉

ウォロフ語の情報構造と名詞述語文 Information structure and nominal predicate sentences in Wolof

池邊 智基
Tomoki Ikebe

日本学術振興会特別研究員（PD）／東京大学大学院総合文化研究科
JSPS Research Fellowship (PD) / Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo

要旨：本稿は『語学研究所論集第21号』に掲載されている「情報構造と名詞述語文」に関する質問票に沿って得られたウォロフ語のデータを提供することを目的とする。

Abstract: This article aims to provide the Wolof data obtained through the questionnaire on ‘Information structure and nominal predicate sentences’ cited in the *Journal of the Institute of Language Research* 21.

DOI: <https://doi.org/10.15026/0002001070>

キーワード：ウォロフ語, 情報構造, 名詞述語文

Keywords: Wolof

1. はじめに

本稿は特集「情報構造と名詞述語文」のアンケートに沿って、ウォロフ語における情報構造と名詞述語文に関する調査結果を示し、ウォロフ語のデータを提供することを目的とする。

ウォロフ語は、ニジェール・コンゴ語族の大西洋諸語に属する言語である。話者は西アフリカのセネガル共和国、ガンビア共和国、モーリタニア・イスラム共和国に存在する。中でも、セネガル共和国ではウォロフ語は国民の9割以上が理解するリンガフランカとして知られている。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

以下に、アンケート項目の1から20までの例文のウォロフ語訳を掲げ、それぞれの項目ごとにコメントを加える。調査方法は、日本語と英訳の文章をもとにした筆者による訳文に、インフォーマントからのチェックを受けるという手法をとった。インフォーマントは、セネガル共和国ダカール州在住のガウス・ケベ氏 (Gawsou Kebe, 20代・男性) と、ルーガ州在住のバンバ・ンバイ氏 (Bamba Mbaye, 30代・男性) である。表記法はセネガル政府が作成した正書法¹に準拠し、データのグロスの付け方と解説は、砂野 (1994), Diouf (2009, 2011), Robert (2022) を適宜参照している。

ウォロフ語の文法的特徴について説明する。ウォロフ語の基本語順は SVO で、主要部先行型である。ウォロフ語の動詞体系は、複雑な形態論的特徴を持つ。動詞は基本的に無変化だが、動詞に前置または後置される人称、数、時制、アスペクト、モード、極性などの情報を伝える様態要素と、それに融合された人称標識が変化し、しばしば語順の変化も伴う。これらの様態要素が文の情報構造 (焦点) を決定する。こうした様態要素と人称標識が変化するウォロフ語の動詞体系は、屈折のパラダイムとして総合的に捉えられるものの、人称によって不規則な語形変化をもつために多くの研究では「活用」と呼ばれる (Robert 2022: 38)。

ウォロフ語の活用で代表的なものを以下に示す。①物事を現実起こったこととして表現する *mu ngi* 活用 (提示形)。②主語に焦点が当てられた *moo* 活用 (主語法)。③目的語、補語に焦点が当てられた *la* 活用 (目的語法)。④動詞を強調する *dafa* 活用 (過程法)。⑤過去に起こった出来事の結果相を示す *na* 活用 (断定法／終止法) がある (砂野 1994: 7–11; Diouf 2011: 67)。

それぞれの活用の語彙的意味を説明するために、ここで形態素ごとに説明を加える。まず、ウォロフ語の主語人称代名詞は、*ma* (1SG), *ya* (2SG), *mu* (3SG), *nu* (1PL), *yeen* (2PL), *ñu* (3PL) である。①*mu ngi* 活用の場合、これらの主語人称代名詞に繫辞 (-a) が付され、話し手と聞き手の位置関係を示す指示詞 (*ng-*) を接語として後置する。指示詞 (*ng-*) は近接の場合 (-i), 遠方の場合 (-a) を付すことで話し手からの位置を指定しつつ発話することができる。②*moo* 活用は、主語人称代名詞に繫辞 (-a) が付されたものである。このとき、主語人称代名詞の語末の *u* に -a が付されると母音融合し、*oo* に変化する。③*la* 活用 (目的語法) は、形態素 *la* に融合した人称変化が屈折として生じる。ただし、この人称変化は上記の主語人称代名詞とは異なり、屈折接尾辞として付される。さらに、二人称 (単数 *nga*, 複数 *ngeen*) では不規則な変化を持つ。④*dafa* 活用は、「～する」を意味する動詞 *def* が助動詞として文法化された形態素 *da(f)* に、人称代名詞の屈折が生じる。⑤*na* 活用では、完了や断定を示す形態素 *na* に人称標識による屈折が生じる。ウォロフ語の動詞体系は、様態要素が人称代名詞と結合しながら活用のパラダイムへと発展していったと考えられており、屈折への移行が統一的に行われていない点も多く、形態統語論的な不規則性が認められる (Robert 2016: 174)。多くの先行研究ではこの不規則な語形変化を形態素ごとに分類せず、活用のパラダイムとして記述しているため、本稿のグロスでもそれに従った表記としている²。それぞれの活用と語順は以下の表1の通りに変化する。

¹ ウォロフ語の正書法に基づく表記と、音素の対応を以下の通り示す。説明が必要な文字については IPA による音価を添えている。母音は *i*, *é* [e], *e* [ɛ], *ë* [ə], *a* [ɐ], *à* [a], *o* [ɔ], *ó* [o], *u* である。母音には短母音と長母音の区別があり、長母音の場合は、母音を二重にして表記し、必要な場合は最初の母音にアクセントをつける (例: *óo* [oː])。母音の区別についての詳細は Ka (1994) または Kaji (1997) を参照。子音は、*p*, *b*, *t*, *d*, *c* [c]~[tʃ], *j* [j]~[dʒ], *k*, *g*, *q*, *f*, *s*, *x*, *l*, *r*, *m*, *n*, *ñ* [ɲ], *ɲ*, *y* [j], *w* である。また子音は、単子音 (例: *b*) と重子音 (例: *bb*)、前鼻音化子音 (例: *mb*) に区別される。単子音は語末では破裂を解放せず、重子音と前鼻音化子音は語末で破裂が聞き取れる (梶・ジュフ 1994: 10–15; Robert 2022: 5)。

² 本稿のグロス表記は特に Robert (2022) に従っている。なお、その他のグロス表記の方法として Diouf (2009) のように様態要素と主語人称代名詞を分けて記述する場合や、Torrence (2013) のように接辞や接語を分かち書きして記述する場合もある。

表 1 ウオロフ語の主な活用

	mu ngi 活用	moo 活用	la 活用	dafa 活用	na 活用
1SG	Maa ngi V	Maa V	O laa / O laa V	Dama V	V naa
2SG	Yaa ngi dem V	Yaa V	O nga / O nga V	Danga V	V nga
3SG	Mu ngi V	Moo V	O la / O la V	Dafa V	V na
1PL	Nu ngi V	Noo V	O lanu / O lanu V	Danu V	V nanu
2PL	Yeena ngi V	Yeena V	O ngeen / O ngeen V	Dangeen V	V ngeen
3PL	Ñu ngi V	Ñoo V	O lañu / O lañu V	Dañu V	V nañu

また、ウオロフ語は be 動詞のようなものが存在しない。「私は～である」といったコピュラ文は、moo 活用か la 活用を用いた名詞述語文で表される。なお、moo 活用の場合は未完了標識 (-y) を付した未完了形で示される。その際の語順は、A, mooy B, あるいは A, B la とすることで「A, それは B だ」という文を作ることになり、「A は B だ」を意味する。

また、ウオロフ語では「高い」(njool) や「熱い」(tàng) といった形容詞的概念は、「状態動詞」と呼ばれる動詞によって表現される。対して一般の行為・動作を意味する「行く」(dem) や「来る」(ñew) などの動詞は「行為動詞」と呼び分けられる。

さらに、ウオロフ語には指示詞を名詞クラス³によって表すという特徴があり、話し手と聞き手の間での相対的な距離や、限定詞を示す接尾辞が変異する（例：近接 -i, 遠方 -a）。また、名詞クラスは不定の位置を示す接尾辞 (-u) が組み合わせられることで、関係詞や疑問詞としても用いることができる（Robert 2022: 19–21）。なお、この名詞クラスと並んで、場所 (f-) や様態 (n-) を示す副詞クラスや、前方照応指示詞クラス (l-) も存在しており、接尾辞の変異によって指示詞や関係詞、疑問詞として用いられる。

2. データおよびコメント

2.1. 対比焦点（主語）

[a] Eey, Amadu ñew na ?

eh, Amadu come PRF.S.3SG

「えっ、アマドゥが来たの？」

Déedet, du Amadu. Babakar moo ñew.

no, NEG.EMPH Amadu. Babakar FOC.S.3SG come

「いや、アマドゥじゃない。ババカールが来たんだ。」

[b] Eey, Amadu ñew na ?

eh, Amadu come PRF.S.3SG

「えっ、アマドゥが来たの？」

³ ウオロフ語の名詞は、単数 8 種 (b-, g-, j-, k-, l-, n-, s-, w-)、複数 2 種 (ñ-, y-) の合計 10 種がある。クラスは主に名詞に後置されるもので、話者と聞き手からの距離に従って接尾辞が変化する（近接限定：-i, 遠方限定：-a, 近接指示：-ii / -ile, 遠方指示：-ee / -ale）。クラスは名詞句のみが変形するので、動詞には影響しない。なお、「人」(nit) にのみ用いられる単数 k-クラスおよび複数 ñ-クラスを除いて、すべての単数クラスは複数 y-クラスが用いられる。名詞クラスは明確な意味の区別は存在せず、主に語頭の子音に影響して使い分けられる（砂野 1994: 1–3）。

Déedet, du Amadu. Babakar la.
 no, NEG.EMPH Amadu. Babakar FOC.C.3SG
 「いや、アマドゥじゃない。ババカールだ。」

質問部分では、結果相を強調する *na* 活用が用いられている。対してその答えでは、否定強調文である *du* 活用、そして、[a]のように主語を焦点化する *moo* 活用、あるいは[b]の目的語を焦点化する *la* 活用で表現されている。この場合[a]と[b]における違いは、[a]ではババカールが主語として強調されている動詞述語文であるのに対して、[b]では「ババカールだ」という名詞述語文となっている点である。なお[b]の *la* 活用は、動詞を後置することで「ババカールが来た」(Babakar la ñëw) とすることも可能である。

2.2. WH 焦点（主語）・WH 応答焦点（主語）

[a] K-an moo f-i ñëw? / Amadu la.
 CLk-Q FOC.S.3SG CLf-PROX come / Amadu FOC.C.3SG
 「誰がここに来たの？／アマドゥだよ。」

[b] K-u f-i ñëw? / Amadu la.
 CLk-REL CLf-PROX come / Amadu FOC.C.3SG
 「誰がここに来たの？／アマドゥだよ。」

Wh 焦点の疑問文は、「誰か」を尋ねる疑問詞 *kan* をもとに作られ、対象が「誰」であるかが焦点化されているため、主語を焦点化する *moo* 活用が使われる。また、疑問詞 *kan*（誰）は人を指すクラス *k* に属しており、指示代名詞 *ki*（この人）や、関係詞 *ku*（～する人）などの形で使い分けられる。関係詞 *ku* を用いた「ここに来た人（は誰か）？」という疑問文が話し言葉ではしばしば見られる。その場合、動詞と補語を後置させるのみで、活用を伴わない文で示される。

2.3. Yes・No 疑問文・形容詞述語応答焦点

[a] Mbaa, Amadu moo gën-a njool?
 Q, Amadu FOC.S.3SG more-LINK be_tall
 「アマドゥのほうが大きいんじゃないの？」

Deedet, du Amadu. Babakar moo gën.
 no, NEG.EMPH Amadu. Babakar FOC.S.3SG more
 「いや、アマドゥじゃない。ババカールのほうが大きいんだよ。」

[b] Ndax Amadu gën-ut-a njool?
 Q Amadu more-NEG-LINK tall
 「アマドゥのほうが背が高くない？」

Deedet, gën-ut-a njool. Babakar moo gën-a njool.
 no, more-NEG-LINK be_tall. Babakar FOC.V.3SG more-LINK be_tall
 「いや、アマドゥのほうが大きくない。ババカールのほうが大きい。」

ウォロフ語の Yes・No 疑問文は, 文末のイントネーションを上げること, あるいは文頭に mbaa や ndax など付すことで疑問が示される。

また, 冒頭で示した通りウォロフ語には形容詞が存在しない。この例文では「背が高い」(njool) という状態動詞が用いられる。そしてこの例文では比較が用いられているが, その場合「より～である／より良い」などの意味をもつ動詞 gën が補助動詞として用いられる。ウォロフ語は二つの動詞が並ぶ場合には, 動詞繫辞として -a を先行する動詞の語末につけるという規則がある。

[b]では, 動詞の否定形疑問文というかたちで説明されており, その返答は同じ内容の否定文を提示することで会話が成立している。また, 補助動詞の否定形は接尾辞 -ut で表され, その際も後置する動詞繫辞として -a を付す。

2.4. 文焦点 (自動詞文)

[a] L-an moo f-a xew ?
CLI-Q FOC.S.3SG CLf-DIST happen ?
「(電話で) どうしたの？」

Dafa am k-u ñów.
FOC.V.3SG have CLk-REL come
「誰かが来たんだ。」

[b] L-u f-a xew ?
CLI-REL CLf-DIST happen
「(電話で) どうしたの？」

Dara, ag gan moo f-i ñów.
nothing, CLg.INDE.SG visiter FOC.S.3SG CLf-PROX come
「何でもないよ, ここにお客さんが来たんだ。」

ここでの疑問文は 2.2 と同様の構造であり, 事物を指し示すクラス 1 を用いた疑問詞 lan と関係詞 lu によって表現されている。また返答について, [a]では人を示すクラス k の関係詞を用いた「誰か来た」という節 (直訳では「(ここに) 来た人」) で示すことが可能である。その際「いる」という状態に焦点化がされているため, 動詞に焦点化した dafa 活用が用いられている。他方で, [b]での返答では, 不定冠詞が付された「客, 訪問者」(gan) が来たことを示す文であり, 主語に焦点化がされている。

2.5. 対比焦点 (目的語)

[a] Xale b-ii, moo door Amadu ?
child CLb-DEM.PROX, FOC.S.3SG hit Amadu
「その子供がアマドゥを叩いたんだって!？」

Deedet, du Amadu. Moo door Babakar.
no, NEG.EMPH Amadu. FOC.S.3SG hit Baabakar
「いや, アマドゥじゃない。彼はババカールを叩いたんだよ。」

[b] Xale b-ii, Amadu la door ?
 child CLb-DEM.PROX, Amadu FOC.C.3SG hit
 「その子供がアマドゥを叩いたんだって!？」

Deedet, door-ul Amadu. Babakar la dóor.
 no, hit-NEG.3SG Amadu. Babakar FOC.C.3SG hit
 「いや、彼はアマドゥを叩いたんじゃない。ババカールを叩いたんだよ。」

[a]と[b]の内容はどちらに焦点が当たっているかで質問文と返答が分かれている。[a]は主に「その子どもが」「彼は」というように主語が焦点化した文であるため、moó 活用が用いられている。一方、[b]では、「アマドゥを叩いた」「ババカールを叩いた」のように目的語が強調された文として la 活用を用いている。また、その返答では「アマドゥを叩いていない」という動詞の否定形を用いることでも、行為主体と対象を示しつつ目的語に焦点化した表現も可能である。

2.6. 対比焦点（目的語、特に「どっち」という対比的な疑問語の場合）

Am na saaku b-u xonq ak b-u baxa,
 have PRF.S.3SG bag CLb-REL be_red and CLb-REL be_blue
 「赤い袋と青い袋がある。」

b-an nga-y jénd ?
 CLb-Q FOC.C.2SG-IPFV buy
 「どっちを買うの？」

B-u baxa laa-y jénd.
 CLb.REL be_blue FOC.C.S.1SG-IPFV buy
 「青い方を買うよ。」

先述の通りウォロフ語には形容詞が存在しないが、「赤い袋」のように名詞の状態や特徴などを修飾する場合にはクラスを用いた関係節を作る。ここでは袋 (saaku) のクラス b と、「赤い」 (xonq) という状態動詞を使った関係節を作り saaku bu xonq という表現で示される。こうした関係節の用法は非常に多く見られる。また、会話中に名詞の内容が自明である場合には、「赤い (もの)」 (bu xonq) といった関係節のみで省略することも可能である。

「どちらを買うか」という疑問文では、補語を焦点化した la 活用と、袋のクラス b で作られる疑問詞 ban を用いる。この場合、買うという状況は未完了であるため未完了標識 -y が la 活用に接続する。また、「それらのうち」という部分代名詞 ci/ca を用いて示すことも可能である。その場合、未完了標識-y は指示代名詞に接続する性質があるため ci に接続する。以下がその例である。

b-an nga ci-y jénd ?
 CLb-Q FOC.O.2SG LOC.PART-IPFV buy
 「(その中から) どっちを買うの？」

2.7. 述語焦点

Ana Amadu ?

Q Amadu ?

「アマドゥはどこ？」

Amadu dafa am f-u mu dem ci suba.

Amadu FOC.V.3SG have CLf-REL NULL.3SG go LOC morning

「アマドゥは朝からどこかに行った。」

疑問詞 *ana* は、発話者と対話者の間でその対象の存在や状況が共有されている場合に用いられ、名詞を後置することで対象の場所や状況を尋ねる疑問文となる。また、返答文では場所を示すクラス *f* の関係詞 *fu* と中性系 *mu* 活用を用いて、「彼が朝に行くところ」(*fu mu dem ci suba*) という関係節が作られており、それを彼が「持つ」ないし「ある」という動詞に焦点化がされている。それにより、「朝からどこかに行った」という叙述文が作られる。

2.8. WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)

Moom, k-an la door ?

PRO.3SG, CLk-Q FOC.C.3SG hit

「彼は、誰を叩いたの？」

Rakk-am la dóor.

little brother-PSS(.3SG) FOC.C.3SG hit

「自分の弟を叩いたんだ。」

目的語に焦点化した文を作るために、疑問文も返答も *la* 活用が用いられる。なお、2.5[a]と同様に *moo* 活用で作ることも可能であるが、その場合は主語の焦点化が生じる。

2.9. 文焦点 (他動詞文)

[a] L-an moo f-a xew ?

CLI-Q FOC.S.3SG CLf-DIST happen

「(電話で) どうしたの？」

Ah, Amadu door na rakk-am.

ah, Amadu hit PRF.3SG little brother-POSS(.3SG)

「うん、アマドゥが(自分の) 弟を叩いたんだ。」

[b] L-u xew ?

CLI-REL happen ?

「(電話で) どうしたの？」

Ah, Amadu moo door rakk-am.
 ah, Amadu FOC.S.3SG hit little brother-POSS(.3SG)
 「うん、アマドウが（自分の）弟を叩いたんだ。」

ここでの返答における文焦点は、その場で起きた状況か、その場における主語のいずれに注目して叙述するかで異なる。前者の場合は *na* 活用で完了相に焦点を当て、後者の場合は *moo* 活用で主語に焦点を当てている。

2.10. 目的語主題化、主題（目的語）の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性

Ana gato b-a ?
 Q cake CLb-DIST
 「あのケーキはどこ？」

Amadu moo ko lekk.
 Amadu FOC.S.3SG O.3SG eat
 「アマドウが食べちゃったよ。」

質問者と返答者の間で目的語の主題が継続する場合、指示代名詞 *ko* が用いられる。指示代名詞の位置は基本的に動詞に前置される。ウォロフ語の他動詞では基本的に目的語が脱落することではなく、指示代名詞 *ko* の挿入が行われる。

また、指示代名詞 *ko* は物事だけでなく、3 人称単数の目的代名詞も意味する。例えば「アマドウが彼／彼女にそれをあげた」といった文を作ると、以下のように *ko* が連続するかたちを取る。

Amadu moo ko ko joxo.
 Amadu FOC.S.3SG O.3SG O.3SG give

2.11. 分裂文

[a] Teere b-i ma jénd-oon ci bitig b-i
 book CLb-DEF NULL.1SG buy-PST LOC store CLb-DEF
 demb, moo nekk n-ii.
 yesterday FOC.S.3SG stay CLn-DEM.PROX
 「昨日店で私が買った本は、ここにある。」

[b] Teere b-i ma jénd-oon ci bitig b-i
 book CLb-DEF NULL.1SG buy-PST LOC store CLb-DEF
 demb, l-ii la.
 yesterday CLI-DEM.PROX FOC.C.3SG
 「昨日店で私が買った本は、これだ。」

- [c] L-ii, moo-y teere b-i ma
 CLI-DEM.PROX FOC.S.3SG-IPFV book CLb-DEF NULL.1SG
 jénd-e demb ci bitig b-i.
 buy-APPL yesterday LOC store CLb-DEF
 「これが、昨日私が店で買った本だ。」

ウォロフ語の分裂文は、名詞クラスの関係節を用いることで表現可能である。分裂文は基本的に名詞句において成立する。[a]や[b]のように、本 (teere) を主語として、moo 活用か la 活用を後置する方法をとるか、[c]のように指示代名詞「これ」(lii) を主語とした疑似分裂文とする方法をとることができる。

- [d] Teere b-i laa jénd-oon ci bitig b-i demb.
 book CLb-DEF FOC.C.1SG buy-PST LOC.PROX store CLb-DEF yesterday
 「昨日店でこの本を（私は）買った。」

また[d]のように、分裂文の構造をとらずに、la 活用を用いて動詞を後置し「本を私は買った」(Teere bi laa jéndoon) という文を作り、「店」や「昨日」といった要素を付加することでも表現可能である。

2. 12. 指定文 主題（名詞述語文の主語）の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性

- [a] Moom, jàngalekat la.
 PRO.3SG teacher FOC.C.3SG
 「あの人は先生だ。」

Dafa-y liggéey ci ekool b-i
 FOC.V.3SG-IPFV work LOC school CLb-DEF
 ñaar fukki at ba leegi.
 two ten year until now
 「この学校でもう 20 年働いている。」

- [b] Jëmm j-a, jàngalekat la.
 Person CLj-DIST teacher FOC.C.3SG
 「あの人は先生だ。」

L-u tollu ci ñaar fukki at ba leegi
 CLI-REL get to LOC two ten year until now
 mu ng-i jàngale ci ekool b-ii.
 PRST.3SG PRST-PROX teach LOC school CLb-DEM.PROX
 「この学校で教えて、20 年が経っている。」

二文目の主語は dafa 活用でも mu ngi 活用でも 3 人称単数であることが人称活用によって示されているため、主語の脱落は起きない。

2.13. 倒置指定文

- [a] Baay-am, moo-y k-ooku.
 father-POSS.3SG, FOC.S.3SG-IPFV CLk-DEM.DIST
 「彼のお父さんは、あの人だ。」

- [b] Baay-am, k-ooku la.
 father-POSS.3SG, CLk-DEM.DIST FOC.C.3SG
 「彼のお父さんは、あの人だ。」

この例文は「ここにいる人たちの中で彼のお父さんはどの人か」という質問への応答文として、主題「彼のお父さん」を主語、「あの人」という指示代名詞を述語とすることで成立するものである。二つの例文で示したように、moo 活用でも la 活用でも表現可能である。

2.14. 指定文

- [a] K-ooku, moo-y baay-am.
 CLk-DEM.DIST FOC.S.3SG-IPFV father-POSS.3SG
 「あの方は、彼のお父さんだ。」

- [b] K-ooku, baay-am la.
 CLk-DEM.DIST father-POSS.3SG FOC.C.3SG
 「あの方は、彼のお父さんだ。」

ここでは主題が「あの人」、「彼のお父さん」を述語とする文である。いずれも moo 活用でも la 活用でも言うことができる。

2.15. 定義文

- “Ganaaw suba,” moo-y bés b-u topp ci suba.
 “day after tomorrow” FOC.S.3SG-IPFV day CLb-REL follow LOC tomorrow.
 「あさってっていうのはね、明日の次の日のことだよ。」

直訳すると「あさって、それは明日に続く日（のこと）である」となる。ここでは「日」（bés）のクラス b で関係節を作り、動詞と前置詞句を用いることで「明日に続く日」すなわち「明日の次の日」を表現している。

2.16. ウナギ文

- [a] Man, kafe la.
 PRO.1SG Coffee FOC.C.3SG
 「私はコーヒーだ。」

- [b] Kafe laa-y jël.
 coffee FOC.C.1SG-IPFV take
 「(私は) コーヒーを頼む。」

- [c] Joxo ma kafe.
give O.1SG coffee
「私にコーヒーをください。」

[a]のようなウナギ文に近い文をウォロフ語の話し言葉で言うことは可能である。ただし、ここでは独立代名詞の「私」(man)に「それはコーヒーだ」(kafe la)を後置しており、la活用の三人称単数で示されている。そのため直訳すれば「私、それはコーヒーだ」となり、代名詞と人称が一致しないため、文脈上相互理解はできるものの不完全文である。また、レストランなどで注文する際は、[b]のように動詞を付したla活用の文や[c]のような命令形の文章のほうがより一般的に用いられる。

2.17. 逆行ウナギ文

- [a] Kafe g-ii, man laa.
coffee CLg-DEM.PROX PRO.1SG FOC.C.1SG
「このコーヒーは私だ。」
- [b] Kafe g-ii, man laa ko laaj.
coffee CLg-DEM.PROX PRO.1SG FOC.C.1SG O.3SG order
「このコーヒーを頼んだのは私だ。」
- [c] Kafe g-ii, maa ko laaj.
coffee CLg-DEM.PROX FOC.S.1SG O.3SG order
「このコーヒーは、私が頼んだ。」

逆行ウナギ文の場合は、[a]「このコーヒーは私だ」が文脈上传達可能な不完全文である。ただし、基本的には[b]を完全文として想定し、「(それ)を頼んだのは」(ko laaj)という部分が省略されたものとして[a]の発話が成立していることが、話し手と聞き手の間で相互理解されていることを前提とする。また、[c]のような言い方も一般的である。

2.18. 形容詞述語文 修飾・並列・述語

- [a] Teere b-u bees b-i te rëy, dafa seer.
book CLb-REL be_new CLb-DEF and be_thick FOC.V.3SG be_expensive
「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」
- [b] Teere b-u bees b-i te rëy, seer na
book CLb-REL be_new CLb-DEF and be_thick be_expensive PRF.3SG
「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」

名詞を複数の語で修飾する際、並列の「〜と」を意味する接続詞teを用いることで二つの状態動詞を並べることができる。その際、クラス指示詞bi(その)は、最初の状態動詞に付する。状態動詞は[a]のようにdafa活用に後置されることで、その状況を叙述する文となる。また、[b]のようにna活用に状態動詞を前置する場合は、想定よりも高いといった話し手の感情を含む表現となる。

2. 19. 意外性

Céy, sukkar s-i jeex na de !
 Oh no sugar CLs-DEF finish PRF.3SG EMPH
 「あつ、砂糖が無くなっているよ！」

意外であること,あるいは驚きなどを表現するのは,文頭に驚きや落胆を表す感嘆詞 *cey* を用いるか,または強調を表す文末助詞の *de* によって表される。

2. 20. 思い出し

Fàtte-woon naa ni am naa ku ma daje-el
 forget-PST PRF.1SG that have PRF.S.1SG CLk.REL O.1SG meet-CAUS
 tay ci bëcég, k-an la woon ?
 today LOC afternoon CLk-Q FOC.C.3SG PST
 Uf, fattaliku naa. Amadu la.
 Oh no remember PRF.1SG Amadu FOC.C.3SG
 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ？ あつ、思い出した、アマドゥだ。」

一文目は、直訳すれば「今日の午後に私と会う人がいることを忘れていた、それは誰だったか」というかたちで作られている。また、思い出しの表現としては、感嘆詞で表現される。ここでは発話者がうっかり待ち合わせを忘れていたことと捉え、嫌悪や恐怖などの感情を意味する *uf* を用いた。二文目の「思い出す」(*fattaliku*) を用いる場合には、その状況に至っているため完了相に焦点化した *na* 活用が用いられる。ここで提示形 (*mu ngi* 活用) を用いると「覚えている」を意味する。

略号一覧

1	一人称	first person
3	三人称	third person
APPL	適用動詞接尾辞	applicative verb suffix (-al / -el)
AUX	補助動詞	auxiliary
CAUS	使役動詞接尾辞	causative verb suffix (-al / -el)
CL _x	クラス <i>x</i> のクラスマーカ	class marker of class <i>x</i>
DEF	定性標示	definitive suffix (-i)
DEM	指示詞	demonstrative suffix (-i)
DIST	遠方空間接尾辞	distal spatial suffix (-a)
EMPH	強調	emphasis
FOC.C	補語焦点化活用	complement-focusing conjugation
FOC.S	主語焦点化活用	subject-focusing conjugation
FOC.V	動詞焦点化活用	verb-focusing conjugation
INDF	不定詞標示	indefinite article (a-)
IPFV	未完了接尾辞	imperfective suffix (-y)
LINK	動詞繫辞	verbal linker
LOC	所格前置詞	locative preposition

LOC.PART	部分代名詞	locative/partitive pronoun
NEG	否定接尾辞	negative suffix
NEG.EMPH	否定強調活用	emphatic negative conjugation
NULL	中性形活用	null tense conjugation
O	目的語代名詞	object pronoun
PL	複数形	plural
POSS	所有格	possessive determiner
PRF	完了形活用	perfect conjugation
PRO	独立代名詞	independent personal pronoun
PROX	近接空間接尾辞	proximal spatial suffix (-i)
PRST	提示形活用	presentative conjugation
PST	過去接尾辞	past suffix (-oon / -woon)
Q	疑問代名詞	question marker (-an) in interrogative pronouns
REL	関係詞標示	relative pronoun marker (-u)
SG	単数	singular

参考文献

- Diouf, Jean Léopold. 2009. *Grammaire du wolof contemporain : Édition revue et complétée*. L'Harmattan.
- Diouf, Jean Léopold. 2011. *Dictionnaire wolof-français, et français-wolof*. Karthala.
- Ka, Omar. 1994. *Wolof Phonology and Morphology*. University Press of America.
- Kaji, Shigeki. 1997. ATR and Wolof vowels. *Gengo Kenkyu* 112: 33–65.
- 梶茂樹, ジャン＝レオポルド・ジュフ. 1994. 『ウォロフ語入門 (ウォロフ語研修テキスト 1)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Robert, Stéphane. 2016. Tense and aspect in the verbal system of Wolof. In Zlatka Guentcheva (ed.), *Aspectuality and temporality: theoretical and empirical issues*, 171–230. Amsterdam: John Benjamins.
- Robert, Stéphane. 2022. Wolof: a grammatical sketch. In Friederike Lüpke (ed.), *The Oxford guide to the Atlantic languages of West Africa*, Oxford University Press.
- 砂野幸稔. 1994. 『ウォロフ語読本：およびウォロフ語文法概説 (ウォロフ語研修テキスト 2)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Torrence, Harold. 2013. *The Clause Structure of Wolof: Insights into the Left Periphery*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

執筆者連絡先 : tomokiikebe818@gmail.com

原稿受理 : 2024 年 11 月 10 日